



Title	CONTEMPORARY NATIVE NORTH AMERICAN LITERATURE : LANGUAGES, PLACES, AND IMAGES
Author(s)	室, 淳子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/45775">https://hdl.handle.net/11094/45775</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	むろ 室 淳子
博士の専攻分野の名称	博士(言語文化学)
学位記番号	第 18963 号
学位授与年月日	平成 16 年 6 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	CONTEMPORARY NATIVE NORTH AMERICAN LITERATURE: LANGUAGES, PLACES, AND IMAGES (現代北アメリカ先住民文学: 言語、場所、イメージ)
論文審査委員	(主査) 教授 木村 茂雄 (副査) 教授 仙葉 豊 助教授 里内 克巳

### 論文内容の要旨

1969 年に、北アメリカ先住民カイオワの作家 N. スコット・ママディ (N. Scott Momaday) による『夜明けの家』 (*House Made of Dawn*, 1968) がピューリツァー賞を受賞して以来、アメリカ合衆国およびカナダにおいて、先住民作家の文学活動はめざましく発展してきた。本博士論文は、『夜明けの家』以降に生み出されてきた先住民文学を通して、言語、場所、イメージの 3 つの側面を中心に、現代の先住民の文化状況と、先住民に課せられてきた社会的・政治的状況における主体の構築をめぐる考察を行なった。

本論文は、序論と結論を含む 7 章で構成されている。序論においては、広く流布しているステレオタイプ的なインディアンイメージへの問題提起を行なうとともに、本研究の方向性、先住民の呼称をめぐる問題、先住民文学とポストコロニアリズムやカルチュラル・スタディーズを始めとする現代の文化理論との節合の可能性と問題性について論じた。

第 2 章では、1960 年代後半以降の先住民文学の成立過程を振り返り、先住民文学の意義と特徴を概観した。先住民文学は、従来のアメリカ文学やカナダ文学において描かれてきた先住民表象とは対照的に、先住民の現在の文化状況や作家たちの背景の混合的・雑種的な側面を示しているのが特徴的である。本論文では、先住民作家たちが、主流の歴史認識に対する先住民側の視点を提示し、先住民の言語や文化を現代の文脈の中に位置づけようと試みている点などに注目して、個々の作品における例を検証した。

第 3 章と第 4 章においては、主に言語の問題を論じた。先住民と言語の問題に関しては、ヨーロッパ移民との接触以降の同化政策により、先住民の言語文化が剥奪されたという歴史背景と、北アメリカの政治の場や社会において、先住民側の声がほとんど存在しないという状況との両面から考察することができる。多くの作家たちは、先住民の口承の伝統を重んじ、物語を語ることに力点をおくが、先住民文学自体がこれまでの先住民の声の不在に対し「語られることのなかった物語」を伝えてきたといえる。

第 3 章では特に、ママディの『夜明けの家』と、ラグーナ・プエブロの女性作家レスリー・マーモン・シルコウ (Leslie Marmon Silko) の『儀式』 (*Ceremony*, 1977) を論じた。この 2 つの小説は、先住民の口承物語の形式を作品に取り入れ、文学テクストにおける口承性の再現を試みている。両作品はまた、同化政策における先住民の言語文化の抑

制と西洋的価値観の支配を描いているが、興味深いのは、先住民の主人公たちが語ることができないとされている点である。『夜明けの家』のエイベルは、テクストを通して沈黙を守り続ける。また『儀式』におけるティヨは、身体の奥底から湧き上がるような感情をやはり言葉にすることができないにもがき苦しむ。これらの姿は、北アメリカ社会において先住民が「語ることができない」という状況を体現しているといえるが、懸命に語ろうとする彼らの強い衝動とその苦しみは、彼らの声が聞かれることのない社会的状況を示すものでもある。先住民たちの沈黙は、時には西洋的な解釈や理解の試みを拒否するものでもありうるが、実際には先住民側の無力さの証明ともなる。しかしながら、『夜明けの家』では、口承文化において重んじられている静寂をエイベルの沈黙に置き換え、エイベルの再生を暗示する。また『儀式』では、先住民文化の雑種化と世界規模の変化が示され、新たな物語をティヨが語り始める。これらの描写には、先住民の沈黙化に対して価値の転換を行おうとする作家たちの姿勢を見出すことができる。

第4章では、先住民と言語に関する問題をさらに追及するため、カナダのクリーの劇作家トムソン・ハイウェイ (Tomson Highway) の2つの演劇——『居留地姉妹』 (*The Rez Sisters*, 1986) と『ドライリップスなんてカプスケイシングに追っ払っちまえ』 (*Dry Lips Oughta Move to Kapuskasing*, 1989) ——を考察した。ハイウェイの演劇で注目されるのは、エイベルやティヨとは対照的に、複数の先住民登場人物が舞台の上で激しく喋ることである。これらの饒舌な人々の姿は、先住民の社会的な沈黙状況を打破する力強さを提示するものである。ハイウェイの演劇が先住民と言語の問題を重要視していることは、両作品における言語障害を持つ登場人物の描写にも投影されている。両作品は先住民社会における植民地化の影響を、登場人物の女性化や幼児化を通して示すが、特に『ドライリップス』におけるディッキー・バードが語る言葉を持たず、優勢的な西洋的価値と伝統的価値の間で、分裂した雑種的な声を発する瞬間には、先住民の困難な言語文化的位置が凝縮されているといえるだろう。

第5章では、先住民と場所の問題をめぐり、とりわけ移動という観点から考察を行った。先住民の姿は、自然——特にアメリカ西部の荒野——と強く結びついて想像され、固定された風景と変動のない単一の文化の中に封じ込められて認識されてきた。居留地への固定化の歴史は、先住民の身体的・文化的な移動をさらに困難なものにしている。だが、先住民の歴史に多くの移動が伴ったことは、先住民たちが通訳やガイドとして移住者に同行し、ショーの見世物として各地を訪ね、居留地への強制移住や再移住政策による都市への出稼ぎを行うなど、数多くの事実が裏付けている。また、より現代的な現象としては、ビジネスや旅を主体的な移動の例として挙げることもできる。先住民作家たちは、しばしば場所の問題をテーマとして取り上げ、一定の場所への固着の観念を疑問視する。チペワの作家ジエラルド・ヴィズナー (Gerald Vizenor) の『悼む者』 (*Griever : An American Monkey King in China*, 1987) は、アメリカを離れて中国を旅する先住民を描くが、中国との文化的・政治的共通性を浮かび上がらせ、先住民の可動性・文化横断性を提示する。文化大革命後の共産主義社会において、主人公グリーバーは、被抑圧者と社会的逸脱者を解放しようとするが、その一方、グリーバーが直面するコミュニケーションのギャップや、「アメリカ人」としての彼の優位性が示され、世界におけるアメリカ先住民の両義的な位置が暗示されている。また、チペワの女性作家ルイーズ・アードリック (Louise Erdrich) の『アンテロープ・ワイフ』 (*The Antelope Wife*, 1998) は、現代アメリカの多文化的・消費主義的な都市文化における先住民たちの姿を描くが、ここでもまた、先住民たち自身が消費文化に染まり、第三世界の低賃金労働と環境破壊を基盤とした現代アメリカ社会の一員にほかなりないという皮肉な状況が浮き彫りにされている。『アンテロープ・ワイフ』は多くの女性たちの移動を描き、彼女たちの移動の自由さを示すが、その一方で、都市に彷徨う先住民の姿にも注目することができる。本章ではさらに、先住民にとっての居留地の両義性も考察した。

ステレオタイプ的なインディアンイメージに関しては、言語や場所をめぐる問題においても考察の対象としているが、第6章では、先住民文学とステレオタイプとの関わりをさらに詳細に論じた。先住民文学は、時に獰猛で、時にロマンティックな野蛮人という、外から与えられたイメージの作為性をあばくとともに、その支配的なイメージが先住民に与えてきた影響を描き出す。これらのステレオタイプに直接対峙し、その無効性を露わにする試みは、特に、スポカーン/クール・ダレーヌの作家シャーマン・アレクシー (Sherman Alexie) の映画『スモーク・シグナルズ』 (*Smoke Signals*, 1997) に見ることができる。『スモーク・シグナルズ』は、写真や西部劇によって強化されたインディアンイメージに対抗するように、従来の無表情さに対して笑いを、沈黙に対して饒舌さを提示する。先住民の登場人物自らがインディアンイメージを真似ようとする描写を挿入したり、西部劇における英雄像の不自然さを指摘

することで、イメージ作成という行為そのものを脱構築しようとする。

30年余の歴史を経て、先住民文学とその研究は広がり、様々な展開を示してきているが、北米先住民文学に関する国内における本格的な研究はいまだに数少なく、多くは断片的なものに留まっている。また、一般社会においても、固定的な先住民のイメージは根強く、北米先住民文学の存在も多くは知られていない。本研究がこれらの先住民文学の本格的な研究への布石となれば幸いである。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、1960年代から現在までの北アメリカ先住民文学の全体像を、言語・場所・イメージという三つの側面を中心に描き出している。素材の豊富さ、分析の緻密さ、理論的な洗練度などを兼ね備えた論文で、この分野においては日本で初めての総合的・本格的な研究と評価できる。

なかでも先住民文化における言語と沈黙、そして発話の可能性の問題を扱った第3章と第4章の分析は秀逸である。そこでは、N. Scott Momaday と Leslie Marmon Silco の小説や、カナダの Tomson Highway の演劇を素材に、同化政策による文字通りの言語の剥奪、主流社会による先住民の「沈黙化」、先住民側の「沈黙による抵抗」、そしてこのような状況から、先住民たちの新しい「雑種的」(hybrid) な「声」が生み出されるプロセスが、スピヴァックのポストコロニアル理論なども踏まえながら多角的に論じられている。先住民文学が誕生するダイナミズムそのものに鋭く迫った論考といえよう。

Gerald Vizenor と Louise Erdrich の諸作品を通し、先住民居留地の両面的な意味や、彼ら/彼女たちの広範な「移動」という現象から、先住民たちにとっての「場所」の意味を論じた第5章においても、グローバリゼーション時代におけるアメリカ先住民の微妙な位置づけといった斬新な視点が提起されている。

「イメージ」に関しては、とりわけ、Sherman Alexie の脚本による映画を分析した第6章において、先住民のステレオタイプ化や、そのようなステレオタイプ化に抵抗・対抗する先住民たちの戦略などが精緻に分析されている。また本論文が、分析対象をこのように映像文化にまで押し広げている点は、先住民作家の多面的な活動の実態を浮き彫りにするとともに、狭い意味での文学研究を乗り越える文化研究の可能性を本論文に与えている。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。